

戦時下雑誌『国民文学』の位相（承前）

— 田中英光を中心に —

渡邊澄子

A study of 『Kokumin Bungaku』

— Tanaka Hidemitsu's Work —

Sumiko Watanabe

はじめに

今年二〇一四年八月六日の広島原爆投下六九年に当たる平和祈念式典で安倍首相のスピーチが前年のコピペで「深い反省」も「不戦の誓い」もなかったことで批判を浴びた。知識人のノーマルな感覚ならコピペといわれたらプライドが傷つき恥じるだろう。ところが、鈍感なのか傲慢なのか、九日の長崎でもコピペだった。市長のとりわけ期待された長崎市長のスピーチは昨年に比べて鋭さがやや欠けていたのは政権の動向への思惑が働らいたのであれば情けない。それに反して被爆者代表の城臺美彌子さんの「平和への誓い」は美事だった。事前に配布されていた文言の「今、進められている集団自衛権の行使容認は、武力で国民の平和を作ると言っていますか」を、「今、進められている集団的自衛権の行使容認は、日本憲法を踏みにじった暴挙です」に、さらに配布文面にはなかった、「日本が戦争ができる国になり、日本の平和を武力で守ろうというのですか。武器製造、武器輸出は戦争への道です。いったん戦争が始まると戦争は戦争を呼びます。歴史が証明しているではありません」が付加された、政権への怒りを進らしたものだ。我慢ならずとつさに変えたというこの「誓い」に多くの人が共感、感動し、彼女の勇気を称えた反響が数多く寄せられたという。

ところで安倍首相は、二〇一二年二月の第二次内閣発足から一年八カ月の間に二四回四九カ国を訪ねていて歴代首相の外遊回数をずば抜け

て上回っている。外遊予算（これは税金）一三年度は三億九〇〇〇万円の予算額が足りなくて外務省の他の予算を転用したというが、一四年度は四億八〇〇〇万円に増額している。一五年度は八割増しの約八億七〇〇〇万円が予算要求されたという。世界地図で見る世界の果てまで行くとしていくにもかかわらず、一番大切な隣国の中国、韓国には行っていない。国民大多数の反対をよそに閣議決定した集団的自衛権の宣伝と、原発・武器輸出のトップセールスが彼の外交の主要目的としたら由々しい事態だ。「死の商人」とは学生時代に読んで感動した岡倉古志郎の『死の商人』によるネーミングだが、まことに言い得て妙なる用語と言える。人を殺し生活を破壊する武器産業ほど儲かる商売はないのだから。政権奪還後、高い内閣支持率（これが不思議。知性喪失現象によるのだろうか）を楯に武力で他国を守るといふ集団的自衛権の行使を認める閣議決定まで特定秘密法案成立からまっしぐらに進み、さらに加速させていくために内閣改造と党役員人事を行った。女性活用を声高くあげ、男女平等推進政策実現者を装って閣僚に五人の女性を起用したが、女性なら誰でもいいわけではない。彼女らは首相と足並みを揃える、いわばお仲間であつて眞の女性の味方どころか逆効果すら招きかねない人たちだ。このような状況がまかり通るのは、戦争責任、戦争犯罪を徹底的に追及してこなかったことによると考えられる。そこで、韓国および韓国人民に与えた侵略（武力で外国の主権をおかし、また領土をうばうこと）という用語では包括しきれぬ凌辱の実態を、田中英光を中心に検証して見ようと思う。

二点ほど断っておきたい。論の展開上前稿と重複する部分があるかもしれないことのほか、朝鮮・朝鮮人の用語を使うときは括弧付きにしたことは、「朝鮮」は植民地化に際して勅令によって国名韓国から変えさせられたので、日本の敗戦によって植民地の鎖が解け、韓国に戻つていくという認識による。「傷痕と克服」の著者金允植（大村益夫訳）は地の文に「朝鮮」「朝鮮人」を一切使わず韓国・韓国人を使用している。崔在喆（現 韓国外語大学学長）に問い合わせたところ、韓国では「朝鮮半島」という用語は使われず、「韓半島」と言うという。だが、日本のメディア等は「朝鮮半島」を使っている。訂正すべきではないだろうか。

『国民文学』で活躍した日本人

『国民文学』に名を出している日本人は座談会に出席しただけの菊池寛なども入れれば二三〇名に及ぶ。京城帝国大学教授をはじめ教職者が多いが、不景気で就職難から失業者が増大した頃なので「出稼ぎ」（金史良「天馬」）も多かったようだ。京城帝国大学教授は一六人、助教、講師のほか専門学校や女学校の校長・教員が多い。「朝鮮」侵略と同義の皇民化は日本人軍人による総督府統治によるが、この統治の指導者育成を目的として設立されたのが京城帝国大学だった。戦時下日本の皇国民教育にも言えるが教育は人間育成の基本である。生まれ育つた国の言葉を他国のしかも侵略者の国の言葉に変えさせ、祖先から受け継いだ姓と生涯の幸福を願つてつけられた名前を侵略国の日本の名に変えさせられ

るとは人間の尊厳をふみにじられる凌辱としか言いようがない。本稿は、村山談話や河野談話（まだ中途半端だ）を誠実に引き継ごうとしない歴史の無智さへの怒りを込めて、戦争の実態のほんの一部の検証である。蔵原惟人に「現代日本のプロレタリア戯曲の最高を示すもの」と言わせたマルキストだった劇作家で演出家の村山知義の、「長い歴史を持った言葉を、別のことに置き換へるといふことは、たくさんの苦痛と、矛盾と、損失とを含み、長い年月を必要とするものだ。朝鮮語を国語と置き換へることにしても、私はその必要さと必然性を認め、将来に希望を持つ者であるが」（『文学界』一九四〇・五、「朝鮮文学について」）は転向後の発言とはいえ、他国の母国語の抹殺を許容した発言として許されぬだろう。韓国人にとっては韓国語を放棄せずに筆を折るか、日本語で延命をはかるかは牢獄か転向かの二者択一の時代だった。新体制とも呼ばれた国策と言う用語が使われ出したのは一九三九年のことだが、四〇年一〇月には大政翼賛会発会式が挙行されていて、新体制に合致した国策文学が幅を利かせるようになっていく。『国民文学』創刊はまさにこの新体制文学の実行だった。主宰者崔戴瑞は、優秀な解釈的批評家として知性論者だった。牢獄への恐怖から転向を選んだ好例だろう。韓国文学界で畏敬の文学者李光洙は崔戴瑞の悲劇的転換に先だって「朝鮮人はまったく朝鮮人であることを忘れねばならない。血と肉と骨がすっかり日本人になってしまわねばならない」という「信念をもつ」ようになって（『心的新体制と朝鮮文化の進路』一九四〇・九・四『毎日新報』）と述べている。多くの文学者にとって師表とされていた人たちのこのような発言の影響は大きい。言わせたのは日本帝国主義だった。

総督府直属の緑旗連盟と深く繋がった『国民文学』創刊号（四一年一月）掲載の崔戴瑞による編集要項「朝鮮文学の現段階」は、次の七項目である。（『国民』とは日本国民のこと）

- (一) 国体観念の明徴（国体に反する民族主義的・社会主義的傾向を排撃、個人主義的・自由主義的傾向も絶対排除）
- (二) 国民意識の昂揚（常に国民意識を以て物事を考え且つ書くように誘導。盛り上がる国民的情熱を主題に取り入れること）
- (三) 国民士気の振興（新体制下の国民生活に相応しくない悲哀・憂鬱・懷疑・反抗・淫蕩等の類廃の気分は一掃）
- (四) 国策への協力（不徹底な態度を一擲し積極的に時難克服に挺身。当局の文化政策に全面的に支持協力し、それを個々の作品に努力して具体化すること）
- (五) 指導的文化理論の樹立（変革期の文化界に指導的原理となる文化理論の早急な樹立）
- (六) 内鮮文化の総合（内鮮一体の実験的内容となる内鮮文化の総合と新文化の創造に向かって全知能を総動員すること）
- (七) 国民文化の建設（雄渾・明朗・闊達なる国民文化の建設が最終目的）

日本帝国主義の国策を「朝鮮」全域に広めるために日本語で熱誠的に書け、というのである。まさに「朝鮮文学滅亡論」であるが、これを権

力的に指導、推奨、指喚、誘導、激励したのが日本人だった。韓国人研究者によれば最も悪質だったのは京城帝大法文学部教授で朝鮮文人報国会理事長の辛島驍と、緑旗聯盟主幹・国民総力朝鮮聯盟宣伝部長の津田剛だった。私はこの二人を知らない。「悪質な文学者」には佐藤清・則武三雄・田中英光の三人が挙げられている。私は佐藤清、則武三雄をよく知らない。佐藤清は、『国民文学』の主宰者崔戴瑞が最も尊敬していた京城帝大時代の師であり、戴瑞を先端的皇国イデオログに訓育した人で、詩人である。師を称える文章は多いが、ほんの一例のみ引いておこう。「国民文学」掲載（第二巻一〇号、一九四二・二二）のかなり長文の「詩人としての佐藤（清）先生」の末尾部分である。「永く後進に取つて教訓と鼓舞とな」り、「朝鮮文学が今後日本文学の一環としてその獨創性が問題にされる度に、先生の詩は必ずや想されるであらう。」「半島の皇民化運動が大規模になればなる程、一人一人の靈魂的结合はその重要性を増してくるのである。戦争がいつ果てるとも知れず又半島にも將に徴兵制が布かれようとする今日、先生の最も切なる願ひは、内知人の一人一人と半島人の一人一人とが、崇高純潔なる理念の世界に於いてしつかりと結び付けられることで」、「この切々たる祈願の声がおごそかに聞こえて来るのである」とある。佐藤清について『日本近代文学事典』に載っていないと前号で見逃がしたのは誤りだった。ここには原子朗執筆の短い紹介が載っていた。要点は、「典雅な象徴詩風から人道主義的なおだやかな詩風へと変化を見せた。詩歴長く独自の世界をもつ詩人にもかかわらず詩壇の表面に現れなかつたのは、矢野峰人によれば「いわゆる *Stilting* な題材と表現とに乏しい上、中央から遠く久しく離れ住み、世人の注意を引く事が少なかつたためであらう」とあつて、著書題名と、「英文学者として関西学院、東京女高師、京城帝大、青山学院大学の教授を歴任」と記されている。前号で引用紹介した『東北近代文学事典』にも、京城時代を「『国民文学』に発表の場を挙げ、朝鮮文人報国会会員および理事となる。昭和二〇年に京城で定年退官を迎えるまで、約二十年間、朝鮮と日本を往復する生活を送つた」とあつただけで、朝鮮文人報国会について無智である。佐藤清は敗戦（朝鮮にとつては解放）後帰国するや、東洋大学英文科教授となり四九年からは青山学院大学教授となつてゐる。没後、教え子達による「佐藤清詩集刊行会」から『おもとみち』（昭和三十五年晩秋）と『遺稿詩集』（昭和三十六年）の二冊が刊行され、『おもとみち』の「あとがき」には、詩集刊行準備中の急逝を惜しみ、「その強靱な精神が、この高齢を無視して、高らかに、生き生きと躍動していたことは、ここに収められた作品が何よりもよく語つてゐる。氏は、七十五年の生涯を、詩人としての険しい道を、苦しみ、歎び、闘いながら生き抜き、死の最後の瞬間まで、休むことなく、衰えることなく、前進してきたのである。」「あの白熱した詩魂は、残された作品のなかにいつまでも輝やき、必ずや読むひとの心をゆさぶり、不滅のいのちを生きつづけるであらう」とある。さらに一九六二年秋には編集委員会の手によつて刊行された『佐藤清全集』全三巻の「あとがき」に、細密な「詩作年表」と「年譜」を付した事で、「先生の詩人としてのものつとも重要な業績は、初めて全部を網羅することができ、現代詩史上における詩人佐藤清の位置が、将来これによつて正しく評価されることを期するものである」とある。「詳細な詩作年表」というが『国民文学』登場二八回（うち、八回は著書広告）が検証されず、四作と書評的文章二編のみしか記載されていない。全集刊行委員達は『国民文学』原物

を見ていないようだ。当然、彼が戦時下、日本帝国主義の優秀なプロパガンダを果たした戦争犯罪者だったことも知らない。佐藤清の『国民文学』掲載作から詩の一篇「学徒出陣」(第三卷第二号、昭和十八年二月)から紙幅の都合上、ほんの一部分を紹介しておこう。

「国難のために、／血と魂をさゝげ、／国難のために、／青春を燃やしつくすものよ、／これを知れ、／国に死ぬは生きることであり、(一)国とは日本のこと)／真に生きるとは国に死ぬことであるを。」(略)「三千年の歴史は／今きみたちの中に生きかへり、／きみたちは幾億万の／祖先の霊と同じ呼吸をしているのだ。／今こそ生と死の世界は一つとなり、／三千年は一刻の中に実現してゐるのだ。／征けよ、征け、／きみたちの背後には、これらの力が／雲の如く充滿して声援してゐるのだ。」「勇ましく、しかも乱れず／はげしく、しかも静粛に、／征けよ、征け、／おゝ、我等の愛するものたちよ、／そしてきみたちの青春を／惜しみなく燃やせつくせ」(十二月五日、城大・回春苑にて)

これが優れた詩人の優れた詩と言えるのか私にはわからない。韓国(朝鮮)人に徴兵制度が布かれて若者が日本兵として戦場に赴くのを教職の身で「征け、征け」と煽る残酷さに私は身震いする。四卷一号(一九四四・二)の巻頭言、これは佐藤清の愛弟子で思想的訓育をうけた崔戴瑞の筆によると思われるが、「翻つてわが朝鮮の現状を見るに、曩に特別志願兵制度の発布により半島出身学徒の総蹶起があり、今年よりは愈々徴兵令の実施を見る。皇恩の広大無辺なる。半島二千四百万民衆も茲に大東亜建設の第一線に傘下し得るの光栄を担うたのである」の一文がある。今を生きる日本人の私は言葉を失う。詳細とされた「年譜」には、昭和十六年(五十七歳)の十一月に「京城に在つて、月刊『国民文学』(崔戴瑞編輯、人文社)に詩及び詩論その他を引き続き発表。昭和二十年二月まで続く」とあるだけでその内実には触れていない。佐藤清は、戦後、京城での己の果たした犯罪性について深く反省、慚愧したたろうか。その形跡は見当たらない。彼は戦後の日本の学生達にも尊敬されていたらしい。

則武三雄についてもそれは言える。韓国の研究者から「悪質」の筆頭に挙げられている日本人の一人だが、詩人の彼は平安北道警察部の職員だった。「海戦」と題した詩(三卷二号、昭和十八年二月)の最後の方だけを参考までに引いておきたい。

「水と空 相分かつたねば遁れえじ／百千のくろがね砕け／響多く波にのまれぬ／レンドバはなれの奥津城 波は重くひるがへり／波は重くひるがへり／戦ひは幾刻なりしか 水と空相巨り／戦ひて戦ひはてつ／戦ひて戦ひ捷ちつ 八束穂の足穂の 美穂のすめぐにに／障やる黒雲八千潮に撃拂ひしが／見かへればわが友故し」「戦ひて戦ひ捷ちつ／戦ひて戦ひはてつ 任終へて荒雄らはかたみに空に擁しが／機は機と翼交へしが／かへりみればわが友故し／誰かは凱歌を奏すといふ／あまぎらふ群島の海 波重くかへりみれども波白く」「海は再び真

蒼にかへりしこのいくさの碎けし跡かたさへや レンドバの海」

韓国（朝鮮）人の皇民化へのプロバガンダになって酔っている。則武は戦後、戦時下の韓国（人）に対しての「悪質」さぶりを問われることも、自省・懺悔もなく、ふるさとの功績者、優れた詩人として顕彰されている。「ふるさとのゆかりの作家シリーズ」の一冊として『則武三雄と北莊文庫』が出ている。ここに記載された略年譜によると、一九〇九年鳥取県米子に生まれ（本名は一雄）、二九年、十九歳時に朝鮮に渡って総督府嘱託（これが平安北部警察部職員という身分なのだろう）となり、三好達治を生涯の師とした。四五年帰国。四六年に三好達治の招きで福井県坂井郡雄島村に移ったが以後三國に永住。五〇年、福井県立図書館職員となり、翌年、北莊文庫を設立、福井県立図書館を定年退職後福井工業大学付属図書館職員を七四年まで勤めた傍ら、数多くの詩集を北莊文庫から出しているが、福井の文学・文化発展に寄与した功績によって、福井県文化賞（一九八四）、文部大臣表彰（八六）を受けている。没（九〇）後、東尋坊に則武三雄詩碑建立、毎年、偲ぶ会が行われ、九八年以後は「葱忌」として継承されている、とある。生涯を称えた紹介文の在朝時代については、「十九歳で朝鮮に渡り、約十七年間を過ごす。朝鮮総督府に勤務しながら、満州国と朝鮮の国境を流れる鴨緑江を背景とした文学活動を行う」とあるのみで総督府勤務の実態が調べられていない。ここには写真入りで「則武文学に出会える場所」として、「みくに龍翔館」「則武三雄詩碑と葱忌」「円山公民館 則武三雄文学記念コーナー」「大東中学校校歌を作詞」が載っていて、彼の韓国（人）に対する犯罪は黒塗りされたまま、まさに郷土の有名人として顕彰されている。

田中英光の戦時下と戦後

私が学生時代、尊敬していた「偉い」先生の多くのとんでもない戦時下の言行検証は別の機会に譲り、田中英光に的を絞って、戦時下と戦後を検証することにした。芳賀書店版『田中英光全集』全一一巻の「解説」執筆者は誰も『国民文学』はじめ『京城日報』や『緑旗』の原物をしっかり読んでいないように思われる。本稿執筆に当たって、訪韓して資料集める時間を失ったために、『緑旗』と『京城日報』は未見であることを断っておきたい。検証の上、改めて論じる機会を得たい。

多くの評者は英光の生涯を〈青春〉〈思想〉〈頹廢〉と分類しているが〈思想〉は〈戦争〉と置換可能ではないだろうか。青春期を代表するのは出世作かつ代表作の『オリンポスの果実』だろう。この作は「清新」「爽快」な「瑞々しい恋愛を描いた青春小説」と位置づけられ、「永遠の恋人」をキーワードとして読まれてもいるが、私にとつてはそれほど面白い小説ではなかった。オリンピック選手ってこういうものか、という知識を得られたことが最大の成果で、清新・爽快な瑞々しい恋愛が描かれているとは感じられず、英光自身が英光の性情について述べた名譽欲と女と酒の問題が早くも垣間見える作品である。結びの一句「あなたは、いったい、ぼくがすぎだつたのでしょうか。」に私は「いいえ」または「別

に」と答えたくなくなってしまふ。頻出する六尺二〇貫は、一八〇センチ、七〇キロで、今では珍しくもないが当時としては大男だったのだろう。体格のよさを見込まれて早大クルーの選手に選ばれてオリンピック出場(予選で敗退)は彼にとつて宝の思い出だろう。途上の船中で知り合った走高跳びの選手相良八重(作中の熊本秋子)に恋情を感じたのだろうが、これは一方的なもので彼女に積極性はみられない。中途半端な「片思い」小説ではないだろうか。有名作家を夢見ながら戦場にあつても小説から離れられず復員後すぐに書きおいたオリンピック出場体験を素材とした「杏の実」を読み返して私淑していた太宰治に送り、太宰に「オリンピックの果実」と改題され、太宰の世話で『文学界』に載り、幸運にも池谷賞を受賞して作家登場を果たしたのである。英光にとつて太宰は憧憬の作家と言っただけでなく大恩人でもあった。この作品には栄光の青春時代が描かれていることはたしかだが、敗戦後のまだ混乱が続いていたなかで書かれた「わが青春彷徨」(『新潮』四六・一〇)には、「悪夢のよきな戦争時代は私の眼前にあつたものはたゞ頹廢と諦観と絶望だつた」とあり、「酒と女の世界に逃げだしたあとでは、いつも悔いと苦しみにきりさいなまれながら」、「肉の欲望には負けやすく他人の金を使つてまでも、のめりきつたやうに遊びつづけたかつた」とある。その一方で、「私たちの時代の青年少女からみりきつた青春を奪つたものは、軍部であり官僚であり財閥であり」「日本の天皇そのものだとおもふ。」「一人の天皇のためには何百万の人間の生命を捧げるのが正義だと強ひられたとき、私は天皇の本質」を「はつきりと知つた」ともある。そして「私は生命を賭して、すべて奴隷として生きるのを好まぬ全人類と共に戦つてゆきたいと思ふ」、と言ひ、さらに、「人類を死と暗黒の方向にひき戻す、保守反動の権力とたゞかへるだけの力が自分のうちにもそなはつてきたのを知つた。これを私は自分の青春とよびたい」とある。この年三月に共産党に入党していることから、「保守反動」と戦おうとの覚悟を持つたことに嘘はないだろう。敬愛する兄の影響で共産党の党活動に熱中したのは二十歳の時だつたが一年半余で身を引いたのに、四六年三月に入党していたのだから闘志満々だつただろう。だが決意新たに入党した半年後にはアドルムやヒロポンに毒され、鯨飲するようになってゐる。こんな意思力の弱さで「保守反動」と戦えるだろうか。共産党からの正式離党は四七年四月と年譜にあり、たった一年ほどでの脱落である。アドルム三百錠を一升の焼酎で飲んで手首を切つて太宰の墓前で死んだのは四十九年十一月なので、戦後作品は離党を挟んでの短期間のものである。そこで英光の戦時下、戦後の履歴を略記してみよう。

三五年卒業。就職難の時代だつた。横浜、ゴム製造株式会社就職して朝鮮京城の出張勤務となり営業担当となる。三七年二月、小島喜代と結婚。七月一六日、補充兵として召集。教育訓練を受け二月一三日、一等兵に進級して除隊。三八年七月一日、再度応召。中国山西省南部山岳地帯の最前線に送られる。八月一〇日、呉王渡で戦闘。一〇月一五日、長男誕生。一二月、慰安所で得たトリツペル(性病)で陸軍野戦病院に約二ヵ月入院。三九年一月一六日、上等兵に進級(六ヵ月間の兵歴で上等兵に昇進は彼が優秀な兵士だつたからだろうが、除隊時兵長に進級できなかったのは性病による二ヵ月入院という「不名誉」の為だろう)安田武一という。二月、「鍋鶴」を書き上げ太宰に送る。下旬、原隊に復帰し呉王渡に駐留。四月、「鍋鶴」が『若草』に載る。「杏の実」はずでに書かれていた。四〇年一月五日、伍長勤務上等兵として帰還。職場に戻る。三月、東

京の支社に一時勤務、『オリンポスの果実』が池谷賞を受賞、賞金五百円を貰う。四十一年二月、京城出張所に戻り、戦争体験小説を書き始める。二月一日。次男誕生。四十二年、朝鮮文人協会で活動。十一月、東京で開催の大東亜文学者大会参加の文学者たちを迎えに行き京城で歓迎懇談会開催に関わる。十二月、東京転勤となり帰国。四十四年、戦局悪化で家族を静岡に疎開させ、自分は東京に残って執筆。十月、青年工員一〇名と血書嘆願し、勤労報国隊として工場に入る。四十五年四月、英光の勤務する工場が空襲で焼失。八月四日、疎開の甲府先から帰郷していた金木町の太宰を訪ねる。十五日、敗戦で終戦。九月、工場再建の人員整理で退職となる。四十六年、原稿売り込みに奔走。三月、共産党に入党。党員活動。八月八日、三男誕生。アドルム、ヒロポンを服用。四十七年四月、共産党を正式離党。十月下旬、山崎敬子を知り、彼女の家で「酔いどれ船」を書く。十二月九日、敬子連れて下連雀の太宰を訪ねる。山崎富栄と会う。この時が太宰との最後となる。四十八年、生活費、酒、カルモチン等薬物の購入費、さらに女のための金欲しさから大衆娯楽小説を書きまくる。六月十九日、太宰の遺体発見される。衝突からウイスキーとカルモチンを大量に飲んで卒倒。四十九年四月、薬物中毒で入院。退院後も薬物服用。五月二十日、敬子の腹部を包丁で刺す刃傷事件を起こして逮捕、拘留され、拘留所で自殺をはかり松沢病院に入院。十一月三日、太宰の墓前でアドルム三百錠を一升の焼酎でのみ、手首を切つたのを発見されたが死去。置かれていた『太宰治全集』に書かれた文言から自殺だったことがわかる。

この間の金欲しさから書きまくった大量の大衆娯楽小説類は除いて主要作品を羅列してみよう。

「鍋鶴」（『若草』一九三九・五）、「姑娘の聖歌」（『オリンポスの果実』所収、四一・五）、「鈴の音」（『われは海の子』所収、四一・五）、「雲白く草青し」（『文学界』四一・六）、「月は東に」（『国民文学』四一・二）、「呉王渡」（『国民文学』四二・一）、「黒蟻と白雲の想ひ出」（『国民文学』四二・四）、「ある兵隊の手紙」（『雲白く草青し』所収）、「志願兵の奮戦」（同前著）、「山西省の桜」（同前著）、「昔の家」（『新潮』四四・二）、「戦場にも鈴が聞こえていた」（『桑名古庵』収載四七）、「戦場で聖歌を聞いた」（『新小説』四六・三）、「愛と青春と生活」（富国出版社四七・三）、「地下室から」（『季刊芸術』四八・五）、「酔いどれ船」（『綜合文化』四八・一）、「さようなら」（『個性』四九・一）、「奇妙な復讐」（同書、四九・二）、「野狐」（『知識人』四九・五）など。

英光の軍隊勤務期間はさして長く無かったが八路軍のゲリラ掃討戦は激戦だった。全集第三巻所収の島田昭男の「軍隊関係記録」によると、三八年は、敵の遺棄死体約一五〇〇人、日本軍なし。三九年は、一月、遺棄死体二五〇〇人、三月は遺棄死体約七〇〇人日本軍六名、六月は遺棄死体七三〇人、捕虜六三人、八月は約一万、捕虜六六人、日本軍二人、一〇月三二〇人、捕虜一〇七人、日本軍一五名、同月、一八〇五七人、捕虜二二三四人、日本軍三〇六人とある。英光は勇敢な兵士だった。死んだかも知れない激戦を経て帰還後に英光の本格的作家開始となる。それは同時に女と酒と名譽欲の生活となっている。結婚後、教育訓練の応召から帰り、再召集までの約半年の間に中編「時々刻々」を書き上げ「杏の実」を書き始めている。以下、まず、戦時下の英光の作品を概観してみよう。

「なべ鶴」(原題「鍋鶴」)は再度の召集で最初の戦闘体験となる山西省臨晋で書かれている。前線にあつて書く余裕があつたのだろうか。太宰の推薦で『若草』に載つた戦争小説である。中国(支那)人の死体に何の感興も湧かず、捕らえた良民に相撲を取らせて勝つた奴から帰してやると戦場での気晴らしにする。一人の体の大きい中国人に勝つ者はいない。ずば抜けて大きい英光に投げ飛ばしてやれと唆されて力一杯ぶつ飛ばすと、相手はグキッと腰骨を打つた音をさせて土埃をあげて倒れた。「臭い百姓」をいじめる遊びを止めて、折良くやつてきた大行列の結婚式を眺める。日本軍の中国人への侮蔑、差別が露骨で不快な作品だが、結語の鶴が「鍵形に整然と飛ぶその姿は切りぬいたように白く、その声はまことに甘く、まことに北支那の秋深めるを想わせるものがあつたのである。」に救われるが、佳作とは言えない。同時期の作品と思われる「姑娘の聖歌」は戦後作の「戦場で聖歌を聞いた」と全く同じ素材である。当然後者の方がいい。次ぎに、朝鮮(韓国)で総督府によって許可された唯一の皇民精神の昂揚を掲げた日本語文学雑誌『国民文学』に発表された代表的三作品について。「月は東に」は北支戦線でのこと。偵察斥候を命じられたばくちたちの一分隊はいくら疲れても「言霊の幸はふくにの兵」なので弱音は吐けない。昭和十三年の秋、満月に近い頃だつた。大学出の同年輩でサラリーマンだつたという共通性から逸村一等兵とは常に張り合つていた。久しぶりに手紙を書く時間が与えられたとき、兵の一人が「薩摩のイモ」つてどう書くのかと訊いたのに、逸村が即座に「くろかんむりに于」と応じたのにばくちが「違う、薯だ」と怒鳴つたことからあわや取つ組み合いの喧嘩になろうとした時、豎山上等兵が間に入ってその場は収めたがその後はいつそう険悪な仲になつていた。間もなく事件が起きた。四〇〇人もの「紅槍会」に襲われ撃ち合いが始まり相手側に何人もの死者が出た。「紅槍会」とは民兵だらうか。激しい戦闘の末、彼等は逃げた。「道筋の到る処に血潮が転々と散つてゐて、そここの戸板が外されてゐるの」は「死傷者を運んだあと、みえ、附近の軒並にも血潮や弾痕がもの凄かつた」その地で「舍宮」をするために「家屋掃討が命ぜられ」、「虱潰しに掃討して行く」と石門の上に金文字の頌徳の篆額のかかつた立派な家があつた。頑丈な門を破つて押し入り、猛犬を血まみれにしてなおも押し入ると、年の頃七十くらいの老翁が出てきて号泣しながら掌を合わせて哀願する。分隊長が「敗残兵に気をつける」と叫んだ直後、轟然、家がゆらめき煙が立ちこめた。手榴弾の桿を握つたまま血塗れの男の死体は、紅槍隊の先頭に立つて素手のまま立ち向かつてきた男だつた。北支の太陽は燦爛と最後の赤光をはなつて、地平線の彼方に埋没して行くところであつた。逸村が「おい」とばくの肩を叩き東の方に顎をしゃくつた。黄味のなかに血をまぜたような不気味な色の月輪がのっそりと上がつてくるころだつた。戦闘や徴発(侵略)の実態がリアルだ。「黒蟻と白雲の想ひ出」も北支山西省の最南端での戦場実録である。厳しい戦闘で一滴の水も一粒の米もないなかでの激戦で寝ることも出来ない。ひたすら後方支援を待つ。陽は中天高くなつたが、狭く暑い壕内で長時間耐えねばならない。ふと雑糞に石榴が一個あつたことを思いだし、半分を隣の兵にやつて齧つた。ふと見ると落としたらしい石榴の一粒に黒蟻の大群がとりついて必死に引っ張つていた。「支那」の虫はとりわけ痒いので見つけ次第ひねり潰すことにしていたのだが、この時の、黒蟻の大群の姿にはその「異常な美しさに強く胸を打たれた」。戦線では、「血なまぐさい広漠とした戦場の上に悠々

と去来する、白雲の美しさには幾度、胸を打たれたか知れない」。思い出されるのは小川上等兵のことである。国民学校を出ただけの両親は既に亡く、独身の姉一人の、社会の底辺を苦勞してきた勇氣に富んだ二十二歳の彼が負傷した身だったのに、「危ないッ」と咄嗟に我が身を分隊長の前に投げ出して死んだ。戦闘が終わり当地を引き上げる時みんな小川を茶毘にふした。「白雲一片、悠々と流れて、小川の死も、雲の姿も、ともに身にじんと染み込む美しさであつた。」が結語となる作品。兵たちが隠れる無数の大小の塹壕や「漫々と水を湛えた水濠」を「附近の農民を駆りたて、」「堀撃」させたことを罪意識も見られず淡々と描いている。最も長い「呉王渡」も戦場・戦闘の実録風作品である。呉王渡は呉王村のことである。ここも激戦だつた。前夜から夜明けまで歩き通しだつた。二日も三日もの強行軍の後では、敵の弾よりも眠りを求めた。食料もない。友軍は来ない。饑餓と暑さに苛立つ。戦闘の合間に話し合えるのは市川だつた。素封家の三男坊で兄二人は医学博士なのに彼はまだ火を消したことの無い消防夫だつた。皇国史観の信奉者なのにマルクシズムの関連書も読んでいて、にもかかわらず「光栄にも戦場に出して頂」き、戦うことに「生甲斐」を感じる男でもあつて、支那兵を殺した手柄を褒められてもそっぽを向き、俺は「生まれ代わりたい気がする」などとも言ひ、戦果をたてて賞賛されても昂奮しない。死体を残して敵が退散した後、遙かに灰色に輝いた大黄河に作者は「祖国日本」を感じ、「漸く黄昏が迫り、一段と碧み渡つた悠久の天空にも、市川の云つた『祖国日本』が肉感となつて感ぜられたのである。」と唐突に終わる。残された沢山の敵の死体を見ても感情が揺すられることはない。自然の美には感動しながら、殺した死体には心動かぬのが兵隊なのか。

三作中、「月は東に」以外は太平洋勃発後に書かれているが、戦場体験の実録的要素が強く、この時期、優勢を誇っていた日本軍兵士の勇敢さをも浮上させたものになっている。除隊復員後、東京転勤となつた戦時下作品をごく簡単に見ておきたい。「雲白く草青し」は京城時代に書かれた作品だが、ゴム製品会社の営業活動を回想したものである。知らない土地を歩くので道を訊いたりしながら汽車の時間待ちに入つた料亭で、そのの姉妹と時間つぶしに遊ぶ。支那兵を八百も殺したとウソを話しながら、ふと見ると日の丸がはためいていた。「この旗のもと我死なん、これは日本人の信仰だ」と安心して辞そうとすると、姉妹が歌ってくれたのは「愛馬進軍歌」だつた。姉妹は汽車が動き出すまで去ろうとせず見送ってくれた。真つ暗な亀城邑は既に何も見えなかつたが「空を仰ぐと、明団々たる一塊の銀盤が山の端からのぼるところであつた」と言う辛い作品である。帰国後に書いた「志願兵奮戦」はさらに辛い。共産八路軍殲滅の激戦時のことだが隊の中にいた「半島同朋」二十四万の中から選ばれた、特別志願兵の第一回卒業生金文雄（創氏改名した韓国朝鮮人）という真面目な一等兵がいた。輜重隊は二等兵が多い。本隊にいれば最下等だがここでは上位なので彼は嬉しいのだ。高木二等兵が馬の手綱を持つたまま深い激流の河に落ちた。軍曹の命令で助けに入った金は高木もろとも流され敵の弾に当たつて意識を失つた。気付いたら高木を抱いたまま浅瀬に打ち上げられていた。隊に帰る道を模索していた麦畑で支那兵五、六十人をみつける。隠れて動靜を窺う。十人くらいが苦力に変装したのを見る。一方、軍曹は河に消えた二人には構わず、二〇名足らずで百名を越す大部隊を掩護する責任から付近の民家から苦力用の男を捜し出し、鍬やシャベルも民家から徴発して道路の修理をさ

せた。道路工事の進捗ぶりを見に行こうとした軍曹に、あの苦力は八路軍の便衣で味方との連絡を待っていると囁いた男がいた。金だった。手榴弾が投げられ高木は死んだ。争つて逃げる苦力の中に素手で飛び込んだ金は何発もの弾を浴びた。瀕死の重傷を負いながら死体の高木に話しかける。今の「ぼくの心にはただ日韓併合の際の御詔書のなかの大御言がきらきら光って浮かぶだけです。／民衆ハ直接朕カ綏撫ノ下ニ立チテ——その御言葉を思い浮べると、ぼくは今こそ陛下の股肱として死ねるんだ。恥ずかしくない大声で、天皇陛下万歳、を唱えまわることが出来るんだと嬉しい。高木さん、さあ一緒に叫んでください。／天皇陛下万歳！」。この後に作者の「こうしてかれ金文雄は護国の鬼となったのであります。」で作品は括られる。何とも辛く痛ましい作品である。「国民文学」掲載の英光の発言は「朝鮮人」の徴兵が肯定、奨励されている。「山西省の桜」は複雑だ。帰還して三年になるが時折思い出すのは戦友の墓のことだという。戦友の死は「靖国神社にその荒御魂は合祀を賜わっているに違いない」が、死んだその場所に心が留まっているように思われて、死んだ兵士たちの卒塔婆をどんな山の上、谷の底、人跡離れた僻地でも建てるのだった。思い出される酒井上等兵は、大学出で文学・煙草好き、年も二十六歳で彼とは特別仲良かった。ぼくが早々に熱病にかかつて高熱を発した時、なにくれと細かい思いやり溢れる看病をしてくれたが部隊に追いつく三四日前から今度は酒井が猛烈な下痢症状を起こし見る間にやせ細り形相も凄まじくなったが、部隊は猛スピードで南部肅正戦の真つ最中だったので、病身の酒井も不眠のままで炎熱の平野を早朝からぶつ通しで歩いたため、倒れそうになっていたが離れようとしなかった。「軍旗が出座し給うて『捧げエ銃！』の厳肅な一瞬が流れ、遂々この御旗の跡を慕いまつてきて、やまゆかば草むす屍、この御旗の辺にこそ死なめと、各々がその決意を新たにすると、さすが咳ひとつするものもなく、場内水を打った森厳さであったが、やがて軍旗が退座し給い『休めッ』の号令がかか」った時、騒ぎが起こった。倒れたのは酒井ではなかったが、「彼はもう肉体は死に、魂だけで生きているような」状態だった。その後は夜襲戦の多い果敢な戦いが続いたが小休止の時、酒井が流弾に当たって死んだことを知った。彼は大学卒業後林檎作りをしていた。好きなのは山は富士、花は桜と主張する男だった。八ヵ月ほど経ってまた討伐に向かった。戦闘地は鎮風塔だった。酒井の戦死の場所だ。塔の裏手に回ってみると、「酒井上等兵戦死之処」と書かれた黒く汚れた卒塔婆が立っていた。凝然と立ちつくした。支那の山には桜がない。桜のないのは気の毒だが、なんとすばらしい景色の処で死んだじゃないか、と声をかけた、という作品。「ある兵隊の手紙」は今、北満の守りにについている友人からの手紙である。前作となぜか同じ林檎園をしていた二十七歳の独身で、東大卒の熱心なトルストイヤンだったが将来は作家となることを夢みていた。作品はその彼の手紙で構成されている。友人からの手紙の丸写しではなく、英光自身の真情吐露ではないだろうか。四通目の長文の手紙は日本の一流総合雑誌に載った小説を読んだの怒りの表白になっている。「御時勢への阿諛、追従、便乗、色目等々の他」には何も無い戦争文学ではないか、と批評は厳しい。「戦地に来て、初めて個の生命の美しさ、殊にそれが国家に捧げられるときの唯一無上な美しさに思い当たりました。その美しさが判らぬ、戦争作家よ、戦争小説を書くな、立派な戦争をしている日本の恥だ、とぼくは怒鳴りたい。ぼくはいまこそ便乗作家たちを蛇蝎のように憎む。」とあって、

この手紙には戦地に取材した作品を書いてきたばかりを慚愧させたとある。最後の次の手紙はさらに長い。十二月八日の宣戦の大詔を「零下三十余度の凍った空気をりんりんと振わせて」「金色の大御言を謹聴し」たが「思わず肩の辺がぶるぶる波打って震えがとまらない」かった、この「優れたる国に生れた幸福を、今つくづく感じて」いて「たとえ犬死にをしても日本人として死ねたら満足だと思えます。米英よ、糞食らえ。日本万歳。」で結ばれた、まさに皇道精神を露呈した作品である。「昔の家」は、東京に転勤後、会社が軍需会社に指定された時、青年社員十名で現場工員への「血書嘆願」を社長にだして認められ、国策の増産に直接参与するが、その行為を独善的と批判され「ペンをハンマーに代え現場に飛び込」む事の重要性を社員に向けて書いたが嘆願書とそれを批判した社員への二書は「私が書いた」。十人は会社の江ノ島にある錬成道場で訓練をうけたが野戦で十里、二十里の強行軍に慣れていたのでここでの訓練は「屁の河童」だった。七歳の頃から任んだ家はこの近くだ。仲間から離れて行ってみる。古ぼけてはいたが昔の家は確かにあったが、感傷はなかった。「私は大声で軍歌を怒鳴りながら、仲間のあとを追った」という小説だが、これは翼賛小説と言えるだろう。

京城勤務から東京転勤となったのに際しての「朝鮮を去る日に」（『国民文学』四十二・十二）は、朝鮮には二、三年の滞在の予定が約二年間の二度の軍隊体験を挟んで、「京城娘を嫁に貰ひ、男の子まで二人できた」八年を暮らしたことになり、京城が故郷のようにも感じられるとあって、サラリーマン生活より作家人生の基礎を作られた地としての思いの強さがしのばれる。この文章によると、京城に来て、第一に紹介されたのが『京城日報』学芸部長の寺田瑛で、彼の紹介で朝鮮文人協会に入り、会社関係の人の紹介で『緑旗』に、寺田の紹介で『国民文学』にと広がっている。『国民文学』の主宰者崔戴瑞や李光洙（香山光郎）はじめ、寺田による紹介で京城帝大教授で朝鮮文人報国会理事長の辛島驍その他朝鮮文壇での著名人との知遇を増やしている。総督府の下部機関である警察部の職員だった則武三雄は以前からの知己で、悪所までも細かく案内役をして貰っている。勤務で京城に来たものの、名誉・自己顕示欲の強い英光が京城に来て早々いわば有名人との交流を深めていったのだが、その人たちは（皇道精神の昂揚）のプロパガンダを努めた文学者集団中の最も「悪質」な人達だった。朝鮮を去るに当たって英光が朝鮮文壇に残した言葉は、「半島の文学の行く道は、最早明瞭であつて、大きな意味での日本文学の一翼を成すべき方向に進むべき事と、第二にその為には諺文（韓国語）文学を揚棄して、一日も早く国語文学一本建となるべき」で「唯一の文藝雑誌『国民文学』の推進力に甚だ恃む処多」く、崔戴瑞氏、金鐘漢氏の「堂々たる御奮闘を析つて止まない」である。同誌の「大東亜戦争一周年を迎える私の決意」には、「詔勅にも『衆庶ハ各々其二本分ヲ尽シ』と仰せられて居りますが、「億兆一心で一生命になつて」「努力」したいとある。帰国後『国民文学』に寄せた（四十三・十）「忘れえぬ人々」には「人間生死の段上にあつて、真に、忘れえぬのは、大君であり、親であらう」とある。

以上、戦争下での作品は日本帝国主義の走狗という以上に皇国イデオログとしての機能を積極的に果たしていたことは否定できない。では

戦後に書かれた戦争小説にはどのような変化が見られるか。「戦場にも鈴が聞こえていた」はいい作品だ。重い装具を背負い五日も六日も降り続いた雨の中を空腹を抱えた「ぼくたち」は民家や中国人を見ると「命令も指揮もなしにどッと我勝ちに飛びかかって、食えそうなものは一つ残さず徴発」した。度を超えた疲労から足を滑らせて前にのめると百足行列は総倒れになり、谷に落ちるとそのまま戦死とされた。または、進む行列が深く早い谷川にはまり、悲鳴を上げながら流されていけば、それも戦死となった。家があれば略奪を小隊長が先になつて行い、「山間の部落はぜんぶ焼けとの部隊命令が出ていたので、兵隊たちは持参してきた石油をかけて家々に放火した。火の中に繰り広げられた光景は地獄だった。小雨に打たれてばちばちと弾けながらがっている何人もの良民の死体や纏足した老婆や子供の死体もあつたが兵隊たちはそれらには無頓着で、放火の熱で暖をとり、濡れた服を渴かしたのだった。飢えと疲れから「獣」のようになっていたばかりも、流れ出す血潮でぬかるみになってそこに子供服や、半焼けの本や帳面やまだ新しい刺繍のされた女の靴などの散乱を汚いとしか感じなくなっていた。近くでりんりと鈴の音がした。好奇心に駆られて行ってみると親子の馬だった。鈴は子馬の首に付けられていた。また別の行軍の時、突然ゲリラの奇襲に遭った。そこは五十戸ほどの小村だった。住民たちは慌てて逃げた。八路军は殲滅したとの情報が入っていたので安心してだらけきっていた。その時、「あそこにいるのは敵と違うか」と言う者がいて見ると、山道を良民らしい男がすたすた歩いてきた。西山上等兵が「五両で賭けるか」と言い、横井一等兵が「よっしゃア」と応じて西山が撃った。人影はぱたりと倒れた。射的屋での人形を倒した得意顔だった。と、その男がむっくり起き上がって山を駆け下りていったのを双眼鏡で位置を確かめて撃った。その男は死んだ。西山は横井から五円受け取った。銃声に怯えたらしく男が茂みから這い出してきた。百姓です、百姓ですと地面に頭をこすりつけて哀願する農夫の財布を西山はもぎ取った。またの日の激戦で、敵に多くの死者が出た。戦闘が終わって食事にかかっていた時、近くで鈴の音がした。見ると、腹部を血だらけにして死んでいる母馬の乳房にすがりついた子馬の首の鈴の音だった。

戦争体験小説は京城での発表作より、帰国後に書かれたものの方が戦争の悲惨さ、とりわけ日本軍の中国の無辜の民への略奪等侵略の実態がやや詳しく書かれているが、それに対しての英光の批判は文脈から嗅ぎとろうとして嗅ぎとれる程度である。戦争に取材した作品以後は「頽廢」ものが多い。書き下ろし長編『愛と青春と生活』（富国出版社、四十七・三）は、英光が就職した京城の出張所時代を結婚事情を絡めた、後の頽廢ものの代表とも言える「野狐」に繋がる女と酒の世界を回顧的に描いた私小説とも言える青春小説だが、「青春」と呼ぶには薄汚なすぎる。戦後文学の代表作は『酔いどれ船』（小山書店、四九・一二）だろう。四二年一月に東京で開催された大東亜文学者会議の出席者の一行を帰途京城で迎えて朝鮮文人協会との交歓の様子が書かれていて、戦時下朝鮮文壇の裏面史的要素を持ち興味に富む。

『緑旗』などと共に日本帝国主義の侵略の表徴とも言える『国民文学』を中心に据えて、皇国イデオログの機能を積極的に果たした犯罪的

日本人、わけても田中英光に的を絞って、戦中・戦後の歴史を辿るのを目的としたが、果たせぬうちに紙数を失った『愛と青春と生活』および『酔いどれ船』をジェンダーで読む作業は次号に譲る。

（二〇一四年九月十八日）